

「訪中が私に与えてくれたもの」

2B 信州大学 青木ももな

2024年9月3日～9月9日、訪中団として中国に渡り、上海、成都、北京を訪問した。有名な観光地や、世界遺産、博物館を訪れたり、本場中国の食事を楽しんだり、現地の大学生と交流を行ったりした。この団体の一員として過ごした一週間は、非常に濃厚で、人生において忘れられないものとなった。以下では、私が訪中団に参加して、考えたこと、得たこと、ここでの経験を今後にどのようにつなげていきたいかということ、を、記述する。

まず私がこの訪中団に参加し、達成したいと思っていたことは、「自分の目で中国を見つめ、人から聞いたことや、メディアの情報からではわからないような本当の中国、本当の中国人像を自分で持てるようになる」ということだった。今訪中を振り返ってみて、この目標は大いに達成されたと感じる。もともと訪中前、私が抱いていたのは、中国は日本に対して悪い印象を持っている、中国は怖い、中国人は適当な部分が多い。そんなイメージだった。何の根拠もないのに、どこかで見聞きした正確かも分からない情報から勝手に想像してしまっていたのだ。行ってみて私が特に印象的だったのは中国の方々は非常に親切で、優しいということだ。実際に私は北京のホテルでこんな体験をした。朝食の後ルームキーをなくしてしまったことに気が付いた。急いで朝食会場に戻り探したが、見つからず、そのままになってしまった。次の日の朝、朝食会場に向かい、もう一つのルームキーで受付をすると、昨日なくしたルームキーをホテルの方が、渡してくれた。その方は日本語はできないようであったが、少しの英語と身振り手振りで、昨日食事会場に落ちていたということ伝えてくれた。私も必死に感謝を伝え、お互いが笑顔になった。日本でない国でこのような経験をすることは思っていなかった。中国の方の優しさに触れることができたことと、言語だけでない何かで気持ちが通じ合ったことがとても嬉しかった。

また上海の博物館、三星堆遺跡、伝統文化の体験、万里の長城見学、故宮の見学等、中国の歴史に触れる機会が多くあり、個人的にとっても有意義な時間となった。もともと歴史に関心があったが、中国史についてはそこまで詳しくはなかった。しかし、日本と中国の長きにわたる交流の歴史や、日本よりもはるか昔から文明があった中国大陸について知ることができ、さらに中国の長い歴史を学習したいと思うようになった。

現在私は、信州大学の教育学部で英語教育や、グローバルな事柄について学んでいる。幼いころから国際交流に関心があり、今回の訪中団にも積極的に参加した。この経験を今後の学びに大きくつなげていきたいと考えている。私は英語教育コースで教育について考えているが、訪中団に参加したことで、将来は、英語という言語を教えるだけでなく国際理解や、国際交流、多文化、多言語についても深く言及し、未来の子どもたちに希望を与えることができるような人物になりたいという考えを持つことができるようになった。

私は今後、日本と中国の友好関係の構築に寄与したいと考えている。実際に中国に行き、中国の方と交流し、その文化や食事、生活に触れ、友好関係の構築は必ずできるものであり、さらに強固なものになると確信している。今回このような貴重な機会を与えてくださった協会の方々、関わってくださった中国、日本の全ての方々に心から感謝する。そして、時には苦楽を共にし、時には沢山の刺激をくれた訪中団の仲間。皆さんと出会えたことが私にとってとても大切な宝物となった。この大学一年、夏の体験は一生忘れることはないだろう。

「進化し続ける中国からの学び」

2-B 島根大学 青木待心

私は、今回の訪中団には、中国における情報化社会の現状や、技術を活かした社会システム・インフラに興味があると同時に、それらと日常的に接している中国国民が、どのように向き合っているのかに興味を持って参加した。それらの興味を元に、今回の訪中を通して、強心に残っていることは2つある。

1つ目は、中国の強さと独立性である。スマートフォンなどで、中国のネットワークを利用する際、ビッグ・テックの一部のサービスは、グレートファイヤーウォールと呼ばれる中国の検閲システムによって、アクセスすることが出来ない。その代わりに、それぞれに代替するようなサービスを中国企業は開発しており、中国在住者は基本的にそれらを使用する。私も実際に、ホテルの Wi-Fi に繋いでみたところ、日本で日常的に使用しているサービスを利用出来ず、中国にいることを実感した。訪中期間中、様々な中国人に、日常的に使用するプラットフォームを聞いたところ、私にとってはあまり馴染みのないものばかりを使用しており、他国に依存せずに、自国で開発・運用を行っている技術力に感銘を受けた。また、交流した中国人のほとんどは、現存する中国のサービスに満足をしており、自国民が納得するサービスを提供し続けていることに中国の国力の強さと独立性を感じた。近年では、web上に投稿や保存したデータが、生成 AI の学習に使用されていることで、プライバシーや著作権の問題が大きな論点になっている。世界的に、誰もが使用しているサービスでそのような懸念がある中で、中国のように自国で通信インフラを保持している独立性は驚くべきものである。

2つ目は、新しいものを取り入れる新規性と、それらに順応していく柔軟性である。上海センタービルや上海博物館、三星堆博物館などでは、AI や AR, VR といった最先端の技術を用いた、展示品の解説や体験型のレクリエーションがあり、既存の型にはまらず、新しいものを取り入れる独創性を実感した。個人的に興味深かったものは、上海博物館での中国の貨幣制度史に関する展示である。古代から中世、近世、近代と青銅貨や紙幣、銀貨など様々なものが展示してあったが、現代の展示では、クレジットカードや QR コードまで紹介しており、中国の貨幣制度史の推移と共に、現代で使用されている技術がこれから歴史になっていくことを実感した。この他にも、同仁堂会社では、技術を活かした巨大な自動販売機が設置されていたり、成都 SF 館では、3D プリンターを使用した壮大な模型が展示されていたり、新しい技術を活用していく姿勢や順応していく姿勢には、私たちが学ぶべきことが多いと感じた。

この訪中を通して、中国は莫大な資本と人口で成長してきた国であることを実感すると共に、成長するために、様々なものを学び、吸収してきた国であることに改めて気づいた。もちろん、中国の強さの裏には、様々な制約や困難があるが、それでも国の成長のために、柔軟に新しいものを取り入れていく姿勢を大切にしたいと心より実感した。

最後になりますが、今回の 2024 日中友好大学生訪中国第 2 陣の活動を行うにあたり、中日友好協会、日中友好協会をはじめ、多くの皆様にご尽力とご協力いただいたことに、心より感謝を申し上げます。今回の貴重な経験と歴史を決して忘れることなく、今後の日中友好に寄与したいと深く実感しました。そして、素晴らしい時間と体験を共有した総勢約 100 名の訪中団員が今後の日中友好の架け橋になることを祈り、筆を置かせていただきます。本当にありがとうございました。

「中国での夢のような体験」

2-B 大阪大学 遊田梨々華

今回の中国訪問では、上海、成都、北京の3つの都市を順番に訪れ、それぞれの都市で異なる文化や歴史に触れることができました。まず1日目に訪れた上海では、黄浦江のクルーズに参加しました。夜の黄浦江を船で巡りながら、兩岸に広がる夜景を眺めることができ、その美しさに心を打たれました。夜なのに、まるで昼間のように明るく輝くビル群が見事で、近代的な建築と対岸の浦東地区の高層ビル群のコントラストが印象的でした。夜景は、まさに上海の都市のエネルギーと発展を象徴しており、そのパワーに圧倒されました。

上海では、博物館も訪れ、特に貨幣の歴史に関する展示がとても興味深かったです。中国の古代から現代に至るまでの貨幣の変遷を知ることで、経済や文化の発展における通貨の役割について学ぶことができました。展示されていた貴重な資料や貨幣は、時代ごとに異なるデザインや素材が使われており、その多様性に驚きました。中国の貨幣の歴史は、長い時をかけて進化してきたものであり、これによって中国の繁栄の一端を垣間見ることができたと思います。

次に四川の成都へ移動しました。成都ではパンダの繁殖基地を訪れ、その飼育環境や保護活動について詳しく知ることができました。多くの観光客が訪れる中、私もジャイアントパンダを間近で観察することができ、その愛らしさに癒されました。日本からの帰国パンダの姿を見て、日中両国が協力して野生動物の保護に取り組んでいることを実感しました。ジャイアントパンダを保護するために、世界中の人々が協力している姿勢に感銘を受けました。

また、三星堆博物館では、中国古代文明の神秘的な一面を感じるすることができました。特に黄金のマスクや青銅器の展示は圧巻で、教科書で見たことのある出土品を実際に目の前にすると、過去の文明がリアルに感じられ、歴史の奥深さに感動しました。三星堆は、他の中国の古代遺跡とは異なる独自の文化を持っているため、その謎めいた歴史に強く惹かれました。

さらに、成都で食べた火鍋も忘れられません。火鍋は日本でも人気ですが、本場の火鍋はその辛さが一段と強く、口の中がしびれるような麻辣の刺激が特徴的でした。訪れた火鍋店は、大きな施設で、ショーやパフォーマンスが行われており、食事そのものが一つのエンターテインメントとなっていました。このような賑やかな雰囲気味わうことで、食文化の豊かさを肌で感じるすることができました。

成都でのもう一つの大きな思い出は、西華大学の学生たちとの交流です。私たちを温かく迎

えてくれた現地の学生たちは、アイスブレイクのためのゲームや、文化体験のプログラムを準備してくれており、その心遣いに感動しました。中国語専攻の私にとって、この交流は非常に貴重な経験であり、会話の多くは中国語で行われました。自信を持って中国語を使い、異文化交流の楽しさを改めて実感しました。短い時間ではありましたが、彼らとの交流は忘れられない思い出となりました。

最後に訪れた北京では、万里の長城に登るという夢を実現しました。長城は実際に目の前で見るとその壮大さに圧倒されました。想像以上に急な階段が続き、頂上付近まで登るのは大変でしたが、上からの景色は言葉では言い表せないほど美しかったです。どこまでも続く長城を見ながら、中国の歴史の偉大さを改めて感じました。

また、紫禁城（故宮）では、映画『ラストエンペラー』の舞台となった場所を訪れることができ、歴史と文化の繋がりを深く実感しました。溥儀の玉座や、彼が書いたとされる文字の展示があり、映画で見たシーンと実際の場所がリンクして、歴史がより身近に感じられました。さらに、科挙の最終試験である殿試が行われていた場所も見学でき、中国の知識階級の誕生にまつわる歴史を学ぶことができました。

今回の中国訪問を通じて、日頃学んでいる中国語のスキルを活かすことができ、現地の人々との会話を通じてさらに中国語の学習意欲が高まりました。また、中国の歴史や文化に対する理解も深まり、より多くのことを学びたいという気持ちが強くなりました。今後は、都市部だけでなく、地方の文化や自然にも触れてみたいと感じています。今回の貴重な体験を提供してくれた日中友好協会の方々に深く感謝し、この経験を自分の成長や学びに活かし、社会に還元できるよう努めていきたいと思っています。

「中国に直接触れて」

2-B 宇都宮大学 五十嵐桃子

今回、私にとって初めての中国訪問であった。私自身は元々中国への悪印象や偏見を持っていたわけではなかったが、訪中を通して様々な新しい気づきを得ることができた。本レポートでは特に印象に残り、気が付くことができたことや自分の気持ちに変化したことについて3つまとめていく。

1つ目は、中国の方々は自国の文化や歴史を大切にしているということだ。成都でパンダ基地を訪問した際、パンダは文化であることや、中国全体にパンダが愛されているということガイドの方から学ぶことができた。中国へのパンダのイメージは強いが、ただ見学するだけでなく、それを守るために行われていることなど、様々なバックグラウンドにまで目を向けられるようになりたいと思えた。また、北京では歴史的建造物を見かけるたびに、ガイドの方がそれについて説明をしてくれて、多くのことを学ぶことができた。特に言われるまで気が付くことができなかったのが中国の少数民族についてだ。2つほどの少数民族を教してもらった際、自分は中国を1つの大きなものとして見ていたということに気が付くことができた。また、上海、成都、北京それぞれを訪問する中でも同じようなことを実感することができたため、中国について細かく、さらに知りたいと大きく興味が沸き、そのようなことを通して、逆に私はまだ日本についても深く知らないことがたくさんあることにも同時に気が付くことができた。それらの気づきを大切に、日本と中国、そして私はこの二国間の文化的な交流に以前から興味があるので、お互いに過去からどのような影響を与え合っているのかについて今まで漠然とした中国しか知らなかったが、実際に触れたことでさらに知識を得たいとはっきり思えた。

2つ目は言語についてだ。私は大学入学から中国語の勉強を始めたため、挨拶や自己紹介など基礎的な会話が少しできる程度であり、それを中国という場で直接中国人と会話するのは初めての機会であった。中国の大学生と交流を行った際、日本語を学んでいる学生が一生懸命日本語で説明や会話をしてくれた時、また逆に私が自分の知っている範囲で会話を試みてそれが伝わった時お互いに笑顔になれたような気がした。翻訳機を使うこともあったが、やはり直接相手の言語で会話できることの大切さに気付くことができ、そして中国人との交流以外に、日本の学生が流暢に中国語を話している姿を見たことがこれからの中国語学習のモチベーションとなった。言語が伝わることはお互いを良く知ることの第一ステップにもなるだろうと考えるので、今後中国語の学習にただ言語を学ぶのではなく会話できることを目標に、より力を入れていきたい。そして3つ目は日中どちらも、多くの人々が良い関係を維持するために働きかけていることだ。今回私たちが訪中団として中国の様々な場所を訪問できたこと、そして多くの素晴らしいことを体験できたのは、そのような働きかけのためであると心から感じた。まとめに繋がる話になるが、今回そのような活動の一環に参加し、多くを学べたことをとても嬉しく思う。特に歓迎レセプションで様々な人のスピー

チを聞き大いにそれを感じることができた。日本にはまだ中国への偏見を持つ人も多くいるが、私たちのような若い世代から認識を少しずつ変化させ、それを無くしていきたいと心から思えた。

今回の訪中を通してメディアやイメージではなく、直接そのものに触れ、目で見ることの大切さを大いに感じることができ、また旅行のみでは体験できないことを多く経験できたため、一生の財産になったと思う。そのような経験をさせてくれた様々な人々に感謝し、またそれらの貴重な経験や新しい気づきを心に留め、日中関係の良好を維持するために何ができるのかを考えながら、これからの学習や考え方、行動に生かしていきたい。

「中国は近い国ではなかった、と今になって思う。」

2-B 東北大学 奥山彪太郎

もともと中国に対する意識関心は強かった。高校の頃は、日中関係の悪化の話聞き、日本と中国の関係に興味を持ち、中国の現状について調べたり、関わりのある人の話を聞いたりしていた。すると、中国は思ったよりも発展しており、一部地域では日本をはるかに超える発展具合がある一方、都市部を離れると今でも農村部ばかりだと。また、仕事観も、勤勉だが、製品を依頼しても製品の質は悪い、との話を中国取引のある会社の人から聞いていた。大学に入っても中国への興味は変わらず、第二外国語として中国語を一年間学んでいた。結果的に身についたことは自己紹介だけだったが、日本に来る中国人、主には留学生は英語が堪能だったため、拙い中国語と英語で積極的なコミュニケーションをとっていた。一緒に呑みに行ったり、遊んだり、文化的な違いを感じることもなく、友好関係を結んでいた。この頃から、中国製品の質も日に日に上がっており、品質を考えた時でさえ、日本製よりも中国製を選ぶことが多くなってきていた。

中国はハリボテの発展を遂げており、質の悪いモノを作り出す国、というイメージから、賢く日本よりも発展している国、というイメージに変わっていた。

この一年、台湾、韓国、米国、オランダ、ドイツ、とさまざまな国を見てきて、表面的な違いは感じていたけれども、どこの国も結局は同じ地球人であり、何ら変わりのない近い国だというイメージを抱くようになっていた。

中国訪問では、中国に対する自分のイメージが正しかったのかどうか、自分の目で確かめること、中国を身近な国だと感じることに。短く言えば、中国の方を Emphasize できるだけの情報をインプットすることを自分の中のゴールとして設定し、中国訪問に臨んだ。

実際に中国に行ってみてまず感じたことは、中国に来た感じを感じなかったことだ。周りに日本人しかいなかったということが大いに影響してそうだが、それでも上海にあったものだけを見ても、これは浅草にありそうだな、お台場だな、など、日本感を感じるものばかりで、どことなく安心していただけだった。

このことは四川に行ったり、北京に行っていた時も同じように感じた。道中にあるものも、売っているものも、舌に合わなかったことを除けば、慣れ親しんだものでしかなかった。モノに着目すれば、中国は日本と近い国だったといえよう。発展しているかしていないか、という目線では、発展中の国らしいな、という印象を受けた。人目につきやすいところの技術的、視覚的発展度合いは日本をはるかに超えるほど、目を見張るものがあった。特に、一般の方が財布を持たないほどキャッシュレスの社会になっていたことには、社会インフラや社会教養の高さも含め、驚嘆していた。と同時に、都市部であっても、一つドアを開けたり、路地を覗いたり、塗装を見たりすれば、たとえ人目につくところであっても物置小屋のように乱雑であり、いい加減なクオリティだと感じることも多かった。映像で見る近未来的な世界

だけじゃないんだな、同じ人間なんだな、と親近感を感じていた。
訪中国で受けた中国への印象をまとめれば、中国に距離感を感じることはなかった、ということになるのだろうか。

いや、感じたことは真逆である。タイトルにもある通り、私は訪中国の一週間を通して中国に距離感を感じるようになってしまった。

現地に行けば、現地の人と話せば、中国のことをより分かるようになる、より知れるようになる、と考えていた自分が浅はかだった。中国は一つの都市でもバカでかい。地区の雰囲気を掴むことも叶わなかった。現地の人々の生活様式も感じ取れなかった。ここはお金持ちエリアかな、この地域の若者はどこで遊ぶんだろう。この酔っ払ってる男女はどこで呑んできたんだろう。知る術はなかった。自由時間がない代わりに、会話をすることで疑問を解消しようとも試みた。私1人では難しかった。世界共通言語だと、中国人なら、若い人なら誰でも通じると思っていた、英語が通じなかったのだ。この度で私は、現地の人と心を交わすことは遂に叶わなかったと思う。-----

中国とより距離感を感じるようになってしまった。
私は結局表面的な部分しか感じることはできなかった。私の中の中国は、ネットの中の情報+観光で得られる情報だけで構成されている。
今回の旅で、私は中国に距離感を感じた。だからこそ、私には、自分の目でしっかりと現状を見つめる必要がある。そして次は、準備を重ね、現地の人との会話もを重ね、中国の本当のVibeを感じたいのだ。そして、日本にいる中でも中国を隣町がごとく、身近な存在として意識し続けたいのだ。

同じ班の友人と立てた約束。「次はみんなでMoutaiを呑みに、ただいましょう。」まずはこれを叶えよう。
近いようで遠かった国、中国へ、僕はまた訪れよう。

「自分の目で見た中国—その常と、友達がいる国—」

2号車—B班 早稲田大学 草野詩織

不易流行

私は今回の訪中を通じて、中国の社会における不易流行の精神を感じた。

例えば漢方関連の商品がスーパーで売られているなど、中国の長い歴史の中で培われた先人たちの知を大切にしながら、上海の摩天楼や全てがスマホ 1 台で完結するような社会など新しいものも積極的に取り入れる社会に触れることができた。そうした中国社会の様子をみることができたことで、日本のニュースや仰天映像、授業で聞いていた中国のイメージが一面でしかなかったことを、身をもって感じた。訪中前は、政治的立場はまだしも、仰天映像に見られるようなスケールが桁違いな出来事が日常的に起こっているのかと、期待と自分たちとは違うだろうという意識の入り交じったような思いがあった。しかし実際の中国の日常は、新しい技術を日本よりも少し早く社会に浸透させているだけで私たちと大きく異ならなかった。例えば中国文化体験施設では多くの親子連れが訪れており機嫌を損ねた男の子にお母さんが手を焼いていたたり、スーパーの出口ではおばさんが大量の卵をバイクで運ぼうと奮闘していたりした。中国の人々の暮らしはどこかベールに包まれているような印象があったが、今回の訪中で中国に暮らす人々の日常を垣間見、霧が晴れたような心地がした。

三都市を巡って

土地における文化の違いも印象的であった。上海・成都・北京では街の造りや流行っている店、食文化、中国語の発音、人の雰囲気異なっていた。例えば上海・北京には日本にもあるようなコンビニエンスストアが街の至る所に見られたが、成都では個人経営の「便利店」が多かった。また街の造りでは、成都是人民広場を中心とした環状の街が形成されていたのに対し、北京は故宮を中央にした碁盤の目状の街であった。三都市それぞれでお世話になったガイドの方、ドライバーさんはみなさんとても親切で、おひとりおひとりのキャラクターを差し置いても土地柄的特徴を感じられた。上海・成都・北京を一週間で訪れるという滅多にできない経験により、広大で多様な中国を比較的視点で味わうことができた。改めて、素晴らしい機会をいただけたことに感謝したい。

現地の大学生との交流

今回の訪中で最も印象深い体験の一つに、成都の西華大学及び北京の中国伝媒大学の学生との交流がある。短い時間ではあったが、食事や文化体験・現地学生による発表を通じて、中国に住む同年代の友人が何を好み、考え、生きているのか知ることができた。交流前は、共通点がなかったり全く異なる考え方を持っていたらどうしようかと緊張していたが、日本のキャラクターが想像以上に人気であったり中国人学生の方から日本に興味を示してく

れたり、彼らにとって日本がとても身近な国であることが感じられた。例えば、日本でも人気の「ちいかわ」は中国の女の子の間でもとても流行っていたし、中国伝媒大学では日本企業がオンラインでワークショップを行い、先生方も日本への留学経験がおありの方が多いそうだ。むしろ私たちの方が、彼らの日本への関心に比べて中国のことを知らないのだなと悔しいような恥ずかしいような気持ちになった。今回の訪中を通じ、これまでの二次情報で形成された中国の印象は自分自身の目で見て感じた友人の住む国へと変わった。この縁を大切に、今後は中国という国を友人の国としてより深く知っていききたい。

終わりに

初めての訪中を通じ、ニュースや大学の先生、中国人留学生の友人など今まで誰かのバイアスが少なからずかかった情報しかなかった中国を自分の目で見て感じる事ができた。今回の訪中団で、私の人生に関わるようなたくさんのきっかけをいただいた。今後は、今回出会った大学生との交流や個人旅行・情報収集を通じて中国の文化や人々の暮らしについてより深く学んでいきたい。末筆ながら、日中友好協会、中日友好協会を始め、今回の訪中に関わってくださった方々に心より感謝申し上げたい。

「中国と私」

2B 北陸大学 倉田華乃

訪中前私は「中国」について考えたときに、真っ先に思い浮かぶことは汚そうということだったり中国人は気が強そうだなと考えたり中国に対して、プラスな言葉を思い浮かべるのよりも先にマイナスなイメージを持たせる言葉が思いつく。しかしこれらは、私が実際に中国に行き体感したわけでもなく日本で報道されているテレビやスマートフォンから情報を得た画面越しの中国であると考えている。私以外にも中国のイメージはどのようなものがあるかと考えた時にマイナスな発想をする人は多くいるのではないかと思う。しかし今回の中国の訪問によってこの考えが真逆であったことが証明された。

私がこの訪中によって考えたことは大きく3点ある。まず中国人の優しさである。私たちは4日目に西華大学を訪れ中国人の学生と交流する機会があった。その交流会では、私は日本語が通じない学生と同じグループで活動したが言語の壁を感じさせないくらいたくさん話すことができたり、扇子や葉などの色付けの活動を通して中国人の優しさを感じ取ることができたりしたと思う。私は大学で中国語を勉強していて発音には自信がある方だと思っていたが中国人と実際に会話をしてみると、簡単な単語でも声調が曖昧であると聞き取ってもらえなかったり自分自身の伝えたいことがうまく伝わらなかったりするなど、私の中国語スキルに関して訪中前に現地でもどのくらい通用するのかを知りたいと考えていたため貴重な経験ができた。また、この機会を通して今後の中国語の学習に役立てるようになったと感じた。中国の学生と交流をする上では、中国語で上手く伝わらなくても呆れることなく私よりも先に翻訳アプリを活用したり英語を活用したりしてくれて私の話を聞こうという意識が伝わってきて中国人の優しさを感じた。そして、扇子や葉の色付けをした際にも1回ずつ丁寧に教えてくれたり出来上がった作品に対しても褒めてくれるなど人相の良さを感じることができた。

また、個人で中国に旅行に行く際には訪れることができないような場所に行くことができたり歴史の資料集で見るとような様々なものを見ることができたり、とても貴重な体験をすることができた。また、世界遺産の中でも有名である万里の長城では実際に足を踏み入れて、石段などその当時ならではのものを触れることができた。そして、想像以上の大きさと長さに驚きを感じたとともに昔の人々は技術も発達していない中でこのようなものを作り上げることができたという事実に感心した。

今回の訪中を通して何よりも思い出に残ったことは訪中を通して日本人同士の友達ができただことである。事前研修では、自ら進んで話すことができなかつたためにあまり仲良くなれずに不安を抱えたままの訪中であつたが、出身も大学も年齢もみんなバラバラで普段の生活では知り合うことのない人たちと1週間生活を共にすることで班員のみんな仲良くなることができ、とても濃い時間を過ごすことができた。日中交流はもちろん日々交流も行うことで新たなコミュニティを形成し1週間という短い期間の中で私自身大きく成長できたの

ではないかと感じた。また、帰国した今、中国に対して以前持っていたような良くないイメージはなく、もう一度中国に旅行に行ってみたいという気持ちや中国についてより一層関心を持ち、文化や建物など詳しく調べてみたい事柄が増えたと感じた。

「日中友好に必要なこと」

2-B 慶應義塾大学 宍戸凜太郎

私は中国に滞在した七日間の経験を通して、日中友好の為に一番大事なことは「お互いをより理解すること」だと考えました。そして、その理解をする為に実際に行ってみる・やってみる・話してみることの重要さに気付かされた七日間でした。

中国という国は日本と距離的にも文化的にも近く、お互いの技術や製品が互いに社会に浸透しており、情報もたくさん入ってきます。それゆえに中国について理解した気になっている傾向があると感じています。中国という国は大きい、人が多い、政治が日本とは違う、何か怖い。そういったイメージが先行し、今ひとつ友好的な感情になり得ないのではないかと考えています。だからこそ、実際に行ってみる・やってみる・話してみる事が大事だと考えました。

実際に中国に行って感じたことは、現地の営みは日本と大して変わらないということです。ビルが建ち並ぶ光景は圧巻であれどその中のお店などには親近感を覚えることができ、道路はしっかり混雑していて、スーパーは日本と同じように存在しています。また、文化体験をさせてもらう貴重な機会を何度か頂きましたが、様々な人がそれぞれの伝統文化に懸ける想いやプライドの熱量は日本人が日本の文化に懸けるそれらの熱量と同じであると気付きました。私も日本の弓道という文化の一端に触れている身として感じたことです。そして、中国での現地の人との交流は私に最も大きな印象を与えました。バスガイドの方々は各地で最大限楽しめるような配慮や努力をしてくださって、「おもてなし」の精神を感じましたし、現地の人は我々と同じようにテーマパークにわくわくし、博物館に熱中し、上海の夜景に同じように感動しました。そして、特に印象に残っているのは火鍋のお店の店員のおばちゃんです。私の拙い中国語と辛いものに苦しむ様子が盛り上がりして、冷たい水と言いながら熱湯を渡すというイタズラを仕掛けてきました。非常に地元の近所のおばちゃん味を感じ印象に残っています。

ここまで七日間の感じたことを非常に拙く纏めてきましたが、ここに共通していることとして、一人が生活するという目線からみた中国の姿や、そこに暮らす人々の息遣いという面では日本と大して変わらないということを感じました。もちろん私が見てきたのは中国のほんのわずか一部ですし、それで全て分かった気になるのは傲慢にも程ありますが、表層的に見える両国の違いの下にある、もっと本質的な人間の生活という部分での共通性は私が七日間で確かに感じてきたことです。

ここでテーマに立ちかえるとすると、日中友好に必要なことは何かという問いに戻ることになりますが、私は「日本」と「中国」という括りを取り払い、友好の単位として国ではなくより個人的な面に意識を向けることだと考えています。「中国」という括りがあるからこそ生まれてしまう先入観や誤った理解は本当に勿体無いものだと感じ、中国という括りを取っ払った先にいる一人一人の人間は日本人と同じ息遣いで生きていて、もはやそこに

日本と中国という立場を意識する必要はないのではないかと思います。先人たちの努力により両国のマクロでの友好の歴史は深いものがあり、一人一人がミクロの視点にフォーカスしてもマクロでの日中友好が損なわれる心配は無いと思います。だからこそ、一人一人がもっと実際の中国を見て、そこで様々な人と交流をすることで実体験として理解することが重要で、その理解がさらなる友好に結びつくと考えています。

こういった機会を与えてくださった関係者の方々には感謝しきれませんし、私もこういった繋がりやの輪を広げる活動が出来たらと考えています。

「訪中国で得た経験とこれから」

2 - B 埼玉大学 竹田想礼

私は、日中友好大学生訪中国第2陣に参加し、2024年9月3日から9日にかけて上海、四川(成都)、北京の3つの都市をめぐり、現在の中国をこの目で確かめた。今回の事業は、以前の訪中国員である大学の先輩の紹介で知ることができた。しかし、私は普段ヨーロッパ文化専攻という専攻に所属して学んでおり、事前研修で顔を合わせたメンバーに比べて中国に関する知識も乏しく、中国語もできないため、渡航前には強い不安を感じていた。いっぽうで、中国のことを知ることで、中国のことはもちろん、日本の文化や政治についてよりよく考えることができるのではないかと思い、期待していた。ヨーロッパの文化を学ぶ上でも、それらの異なる文化を鏡として、結果的に日本の文化について考えを深めることが多かった。まして中国は、古代から日本と交流をもち、あらゆる面で日本に影響を及ぼしてきた国家である。渡航前の私は、このような期待と不安を抱いていた。

まず、不安は杞憂に終わった。中国語については、買い物をする場面、学生と会話をする場面があったが、それぞれ以下のように切り抜けられた。買い物をするときには、キャッシュレス化が進んでいるおかげで、QRコード決済サービス Alipay の画面を見せるだけで会計を済ませることができた。学生との会話では、彼らは日本語を学んでいるため日本語でコミュニケーションをとろうとしてくれた。彼らの積極的なアプローチのおかげで、翻訳アプリや身振り手振りを駆使して、意思疎通をすることができた。しかし、すべての場面で、私は「お客様」であり、中国側のもてなそうとする心遣いがあったからこそ、一週間を過ごせたにすぎない。また多くの場面で、中国語を話せる訪中国員に助けられた。自分の力では何もできなかったことを後悔している。つぎに中国を訪れる際には、もっと勉強して、自ら話しかけられるようになりたいと感じた。

中国での体験は、期待以上にすばらしかった。特に印象に残ったものの一つは、三星堆博物館見学である。博物館は平日にもかかわらず大混雑で、ガイドの方についていくのも精一杯の状態だった。添乗員さんによれば、それでも普通程度の混雑具合とのことで、休日にはどのくらいの賑わいになるのか想像もつかないほどだった。そして中国人観光客がほとんどを占めていた。紀元前2000年以上前の文化の遺跡にこれほどの人が集まる様子を日本では想像できず、中国人がこの遺跡に対してどのような印象や思いを抱いているのか、ひいては中国の歴史というものにたいしてどのような考え方をもっているのか気になった。博物館のつくりそのものも日本と異なる部分がたくさんあり、たとえば座る場所が各所に用意されていることが印象的だった。日本と中国の違いを体感する旅であったが、しかし同じところもたくさん見いだせた。大学生との交流は、その第一のもので、初めて顔を合わせた時にお互いに照れてしまったり、話をしてみればすぐに打ち解けてしまったりと、国は違っても同じ大学生だということを実感した。もちろん話した時間はごく短いもので、これからより仲を深めていくうちにお互いの違いを知ることもあるだろう。しかしお互いが違う人間

であることを知ることも、日中交流の重要な役割であると考えている。

「中国のリアルな姿」

2B 山梨県立大学 田邊天梨

私は中国出身の先生のゼミに所属し、中国語や中国の歴史文化について学んでいます。これまで、中国人留学生との交流や課外活動を通して、中国人の生活の様子や価値観など、なかなかテキストからは知ることのできない知識や情報を得てきました。現地に暮らす人から見た中国の様子はとても興味深く、私も実際に中国を訪れてリアルな中国の姿を見てみたいと思い、今回の訪中に参加しました。

本訪中では五感をフルに使って、生きた中国の言語や文化、歴史に触れることができました。私は、この訪中を通して特に印象的だったことが3つあります。まず一つ目に、現地の人々の暮らしについてです。移動中のバスからはとても大きな建物が見えました。初めは、どれもビルや会社関係の建物だと思っていましたが、全て集合住宅だと聞いて驚きました。さらに、632メートルの高さを誇る上海タワーから地上を眺めると、それらの集合住宅は縦横綺麗に列をなして奥深くまで立ち並んでいました。その数の多さと規模の大きさから、さすが世界2位の人口をもつ中国だと感じました。また、中国の生活に日本文化が浸透していることにも衝撃を受けました。例えば、上海タワーの売店には日本のアニメグッズが数多く販売されていたり、ファミマやセブン、ローソンなどのコンビニもよく見かけました。日本のポップカルチャーであるアニメ文化が国境を超えても人気であり続け、愛されていることに喜びと親近感を抱くと共に、中国と日本の文化的かつ経済的な繋がりを見ることができました。

二つ目に食文化についてです。上海、四川、北京の三箇所を訪れましたが、地域によって味付けが異なることは勿論、どれも私の知る中華とは全く異なる料理だったことに毎回衝撃を受けました。私の印象としては、上海は海鮮料理が多く、素材の味を生かしたテイストが特徴的。四川は唐辛子や山椒などの辛さや痺れを感じさせる味付けが特徴的。北京は、上海や四川に比べて味付けが日本料理に最も似ていると感じました。また、私が今まで食べてきた中華料理がいかに日本人向けの味にアレンジされているのかを実感しました。現地の食事に使われている食材や調味料、調理法、口の中に広がる風味や食感から舌触りまで、どれも私が初めて知る中華料理でした。私は辛い食べ物が好きなので、今回の訪中で四川料理を一番楽しみにしていました。四川料理はどれも美味しかったです。火鍋と麻婆豆腐は別格でした。ただ単に辛いだけではなく、スパイスの香りを楽しみながら美味しくいただくことができました。ですが、口の中が辛くて熱くなっても、お店の方が出してくれる飲み物が熱湯だったことにはカルチャーショックを受けました。

最後に、実際に現地に訪れて発見した「ギャップ」についてです。正直に言うと、私は中

国に行くまでは、中国に対してあまり良い印象は持っていませんでした。ニュースでは反日運動について取り上げられ、日本の観光地では中国人の大きな声が響き、マナーが悪いといったイメージがありました。実際、北京のスーパーのレジに並んでいる時や万里の長城のトイレに並んでいる時、現地の方に平気な顔で当たり前のように横入りされたことには驚きましたが、その反面、それはイメージ通りの姿でもありました。ですが、この中国に対する悪いイメージを覆したきっかけが西華大学との交流です。文化体験の前に行ったアイスブレイクでは日本のアニメについて取り上げられ、歓迎レセプションでも日本や日本語学習について嬉しそうに話してくれました。現地の大学生が私たちのために様々なイベントを準備し、日本に興味を抱いてくれたことに喜びと安心を感じました。このような若者同士の日中交流が増えれば、今後の日中双方のイメージと友好関係の改善につながると確信できた交流会でした。

本訪中は「出会い」の7日間でした。毎日新しい発見と経験に溢れ、充実した貴重な時間を過ごすことができました。期待以上も以下もある旅でしたが、そのすべての経験と感覚が私を成長させたと実感しています。この七日間で得たご縁を大切に今後の活動に生かしていきたいです。

「 - 中国の人々の親しみやすさ - 」

2-B 松蔭大学 中村亜実

中国は広大な国土と多様な文化を持ち、地域ごとに異なる人々の性格や親しみやすさがあります。正直、中国へ訪問する前までは中国と親しみやすさをイメージすることは難しかったです。ところが実際に7日間中国へ訪問したことで考え方が180度変わり、各地域で違った親しみがあると感じました。ここでは、実際に訪問した上海、四川、そして北京の三つの地域における人々の親しみやすさについて感じたことを述べていきたいと思います。

上海は中国の経済的中心地であり、国際都市としての顔を持つため、その人々も非常に洗練されたホスピタリティを持っていると感じました。上海タワーでは、曇りで外の景色を満足に見ることが出来ませんでした。その際に店員さんからAIをモチーフにしたイベントをタワー内で実施していて、景色の代わりに楽しむことができるよと別の提案もしていただきました。観光客に対しても、フレンドリーでプロフェッショナルな対応を心掛けている点が見えました。

ただし、上海の方々はビジネス中心の環境に身を置いているため、時にはビジネスライクな態度が見られることもあります。効率的でスピーディーな対応を重視し、形式的な対応をすることもありますが、これが冷たさと感じられることは少なく、むしろ都市の洗練された雰囲気を反映しています。このようなビジネスライクな側面も、観光客にとっては効率的でありながらも十分に親しみやすいと感じることが多いです。

四川の方々は、パンダの町ということもあり、パンダに似て非常に温かく、親しみやすい性格を持っていると感じました。四川料理のスパイシーさと同様に、人々の性格も温かさとフレンドリーさが際立っています。西華大学との交流時もゲームや体験を通してながら現地の学生とコミュニケーションをとりました。たくさんの現地学生と会話するために別のテーブルを周りながら会話を試みると皆さん、緊張はしていましたが親しみやすく、私たちとの会話を歓迎する姿が見られました。

北京の方々は、伝統的な礼儀を大切にし、私達に対しても丁寧な対応をしてくださいました。礼儀正しさや尊重が重視され、ビジネスや観光においても、相手に対して礼儀を尽くすことが一般的とお聞きしました。

また、礼儀正しさを持ちつつも親しみやすい一面も持っています。万里の長城付近のお土産屋さんでは、丁寧でありながらもフレンドリーで、観光客がリラックスして過ごせるよう配慮されていると感じました。

さらに、北京の方々は、文化的な背景を理解しており、観光客が異文化を尊重することに対しても寛容です。木版と墨を利用し、掛け軸の作成体験を実施する前に先生が歴史から木版

を親切に教えてくださいました。実際に作成をする際にはコツを教えてください、一人ひとり気にかけて見守ってくださいました。このような姿勢は、北京が中国の首都であり、文化的な中心地であることを反映していると感じました。

最後に中国の主要都市である上海、四川、北京の人々は、それぞれ異なる親しみやすさを持っています。上海では洗練されたホスピタリティとビジネスライクな一面が見られ、四川では温かくフレンドリーな対応が特徴です。北京では伝統的な礼儀正しさと親しみやすい接客が魅力であり、これらの地域の人々の親しみやすさは、訪問者にとって快適な体験を提供し、中国の多様な文化を深く理解する手助けとなると感じました。それぞれの地域での交流を通じて、中国の人々の温かさと独自のホスピタリティを体験することができて非常に満足した7日間になりました。

「中国訪問を通して」

2-B 慶應義塾大学 松井大輝

今回の中国訪問では7日間で上海・成都・北京をまわり、様々な経験をする事ができた。その中でも特に3つの経験が印象に残った。一つ目は上海博物館だ。日本とは比べ物にならない展示物の量に圧倒された。学校の授業の資料集で見るとようなものをいくつか見ることができた。中国の規模と歴史を大いに感じる事ができ、実物を見ることの大切さを改めて実感した。二つ目は西華大学での交流である。班ごとに2人の日本語専攻の中国人学生の方に付いてもらい、伝統的な扇子を作った。私はまだ中国語を十分に喋ることはできないため翻訳アプリを使いながら意思疎通をしたが、相手も丁寧な日本語で会話をしてくれた。今回の訪中団で一番中国人の方と関わったのが西華大学であった。2人の学生とはWeChatを通じて今でもたまに連絡を取り合い、お互いに語学の勉強でわからないことがあれば相談をするようにしている。三つ目は万里の長城だ。テレビ画面で万里の長城を見かける中で、人生の中で一度は行きたいと思っていた。万里の長城に行ってみると日本人を含めた観光客がたくさんおり、自分が想像していたよりも壮大でとても感動した。今回の中国訪問、特に以上の3つの経験は私にとってとても貴重な体験であった。正直なところ中国を訪問するまでは中国に対してマイナスなイメージを持つこともあった。テレビのニュースで違法な建築物の倒壊や大声で喋る中国人観光客が紹介されていたり、スマホのアプリが制限されていたりと訪中する前は何か事件が起こるのではないかと身構えていた。しかし、実際に中国に行ってみるとそれらの懸念点は払拭された。とにかく人が優しいというのが私の中国に対する感想である。何か困ったことがあり翻訳アプリでの拙い中国語で助けを求める場面がいくつかあったが全ての人が助けてくれた。建物も綺麗で壮大なものが多く感動した。このことから実際に行ってみて自分の目で見ることの大切さを改めて学ぶことができた。アプリが制限されていたり、建物に入る時の検査や監視カメラなど、不安に感じることは少なからずあったがそれを上回る魅力が中国にはあった。私は中国語を勉強し始めてから半年でほとんどしゃべることはできず、訪中団に参加してはいいのかと悩んでいた。訪中団に参加し終わった今感じることは、訪中団に参加して本当に良かったということである。今までほとんど中国に関心を持っていなかった私が、中国に対するマイナスの偏見を解消し、中国の良いところを知ることができたのは何事にも変え難い経験であったと実感している。私は今1年生であるが、3年生になったら交換留学に行ってみたいと思っている。これも訪中団での貴重な経験のおかげである。また、ほとんど面識のない大学生の方々と7日間を過ごすという経験も大変に貴重であった。同部屋、同グループの方々と交流を通して、訪中団を通じてしか得られなかったことがあったと感じている。改めて、今回の中国訪問の経験は私の人生の大きな転換点になったと確信している。

「異文化交流の旅：中国で得た新たな視点」

2-B 津田塾大学 水野郁絵

私が中国に興味を持ったきっかけは、大学で受講した中国近現代史の授業でした。それ以来、中国の文化や社会に関心を抱き、いつか中国を訪れてみたいという思いがありました。そして、9月3日から9日にかけて、上海、成都、北京の3都市を訪れる機会を得ました。これまで座学で得た知識に加え、現地での体験を通じて、五感を使って中国を深く学ぶことができたと感じています。

訪問中には、万里の長城や故宮博物院、上海博物館、三星堆博物館といった歴史的・文化的施設を見学しました。特に、上海博物館では貨幣の展示が印象的で、貝貨から青銅貨、銅貨、紙幣、そして現代のカードやQRコード決済に至るまで、中国の貨幣技術の発展を丁寧に学ぶことができました。また、成都の三星堆博物館では、古蜀時代の青銅器が展示されており、特にユニークな青銅の仮面には強く惹きつけられました。これらの歴史的施設や建造物を訪れることで、中国の豊かで多様な文化と歴史を肌で感じる貴重な体験ができました。

さらに、訪中国での活動を通じて、中国の人々の温かさにも触れることができました。特に、西華大学での学生との交流が印象に残っています。緊張をほぐすために行ったアイスブレイクでは、伝言ゲームを通じて「早睡早起身体好」（早寝早起きは体に良い）という中国の言葉を教えてもらいました。このゲームのおかげで、場の空気が一気に和らぎ、楽しく交流を深めることができました。その後、中国の伝統工芸である「漆扇」作りを体験しました。水を張った容器に染料を入れて模様を作り、それをうちわや扇子に移すという方法です。西華大学の学生たちがとても丁寧に教えてくれたおかげで、世界で一つだけの模様を作り上げることができました。この体験を通じて、現地の文化に深く触れる貴重な時間となりました。短い時間ではありましたが、西華大学の学生たちと親しくなり、交流を深めることができました。この経験から、異文化交流の意義を改めて実感すると同時に、お互いを理解し合おうとする姿勢の大切さを学ぶことができました。

これまで私はメディアの情報から中国に対してネガティブな印象を抱いていました。しかし、実際に現地の人々と交流してみると、中国の人々の優しさに触れ、互いに理解し合おうとする姿勢があれば、言葉の壁を超えて深い関係を築けることを実感しました。私の拙い中国語でも、真摯な姿勢で接することで、心が通じ合うことができました。メディアを通じて見聞きする中国という国は、あくまで一側面に過ぎません。それにもかかわらず、私たちはわずかな情報だけを頼りに「中国人は～」という大きな主語で、中国という国や人々を判断してしまいがちです。中国での交流を通して、先入観や偏見がどれだけ視野を狭め、相手との関係性の間に壁を作るのかを実感しました。異文化交流から先入観や偏見の危険性を

認識し、より広い視野で人々を理解しようとする姿勢の重要性を学ぶことができました。

今回の訪中団を通じて、中国の文化や社会に対する関心が一層深まりました。また、人々との交流から貴重な学びを得ることができました。このような素晴らしい機会を提供してくださった日中友好協会の皆様、ならびに現地でお世話になったすべての皆様に心から感謝申し上げます。今後もこの経験を大切に、より深い理解と交流を続けていきたいと思えます。ありがとうございました。

「中国を訪れて」

2-B 聖隷クリストファー大学 宮内大輔

まず今回の訪中を主催してくださった日中友好協会様へ感謝したい。私はこの一週間の訪中で様々な経験、学びを得ることができた。今回のレポートではこの一週間について振り返っていききたい。

まず上海について、初めての中国、初めての海外、そしてほとんど話したことがない人たちと共にこれから一週間過ごすことへの不安で胸がいっぱいだった。しかし、上海センタービルからの景色や、黄浦江クルーズからの夜景をみんなで共有することで自然と打ち解けることができた。初めて見る上海の景色は東京とはまた別の賑わいを感じた。東京は狭い空間に様々なものが詰め込まれている印象があるが、上海はビルやマンションと自然が融合されていて、中国の広大な大地を感じさせた。また9月4日には上海博物館で様々な歴史的価値のあるものを見ることができた。施設のなかには伝統的な工芸品や土器、仏像などが展示されており、中国の長い歴史を感じることもできた。特に印象に残ったのは紙幣についてだ。日本の六文銭でよく似ている銭貨があったが、中国でこの形の銭貨が生まれ、それが日本に伝わってきたと考えるととても印象深かった。

次に成都に向かった。成都ではまずジャイアントパンダ繁殖基地研究所を見学した。もちろんパンダを見てとても興奮したが、それと同時にパンダがその町や都市に多大な経済効果をもたらしているという印象を受けた。ガイドさんの話でも冗談ではあるが人々はパンダに敬称をつけて呼んでいるという話を聞いて、潜在的にそういった意識があるのだと思った。また、日本など国内外でのパンダの取引により国同士の交友関係につながることから、パンダの生物学的な魅力だけでなく二次的な効果があることがとても学びになった。次に三星堆博物館を見学し、三星堆村の考古学体験をした。三星堆博物館の展示品は上海博物館の展示品と比べて独特で個性的なものが多くとても興味深かった。また考古学体験では博物館で見た展示品がどうやって古代中国で作られていたのかを身を持って体験することができた。また西華大学との交流について、中国の学生たちと中国文化を体験することができとても良い経験することができた。そして、交流する中で日本について学んでいる中国人大学生たちが日本のどのようなことに興味を持っているかを知ることができた。また、西華大学の在校生の人数が四万人いることにとても驚いた。こういったところでも日本との違いを感じた。

最後に北京に到着した。中国伝媒大学との交流では中国の学生の研究を紹介してもらった。その中で自分の学んでいる保育関係の研究発表がありとても興味深かった。内容としては、家でスペースをとってしまう絵本を回収し家具に替えるというサービスについてだった。家具にすることで思い出を残しつつ絵本を有効活用できるというメリットが感じられた。絵本が残ってしまう問題は日本でも起きていると思うので、このサービスは日本でも利用できると思った。

終わりに、今回の日中友好協会大学生訪中団の訪問は、私にとってとても貴重な経験になった。上海、成都、北京の各都市での多様な体験を通じて、中国の歴史や文化、経済発展に対する理解を深めることができた。今後もこのような交流が続くことにより、日中双方の友好関係が一層強化されることを願う。そして一緒に訪中した日本各所の大学生たちについて最初は仲良くなれるかととても不安だったが、同じ体験をしていく中で最終的には心から分かち合える友に慣れたことがとてもうれしかった。今回の訪中がなければ会うことがなかった人たちと友人になれたことも、今回の訪中の大きな成果の一つだと思う。

「訪中国に参加できたからこそ学んだこと」

2-B 藤女子大学 吉田陽菜子

私はまず今回の訪中国に参加しようと思った経緯として、訪中国に参加する前は、正直に言うと中国に対してそこまでいい印象を持っていなかった。それは日本で取り上げられている中国に関する記事で、中国についていい印象を持つような記事をあまり見たことがないからである。それにもかかわらず「日中友好」という言葉を耳にすることもあるため、実際の中国はどのようなかとても気になるようになった。そこで百聞は一見に如かずということわざもある通り、実際に現地の人たちと交流しないとわからないことも多くあるのではないかと考えこの訪中国に参加することにした。

私はこの訪中国に参加してみて、日本での新聞やニュースなどから得る中国のイメージと実際に現地の人たちと交流してみて感じた中国の印象にギャップを感じた。特に根拠があるわけでもないが、中国人はどちらかというとな愛想がいいというよりはぶっきらぼうな人が多いようなイメージがあった。しかし実際は、ホテルでエレベーターに乗ったときに中国人の男性が「日本人？」と話しかけてくださり「中国によろこそ！楽しんでね！」と笑顔で話しかけてくださったことがあり、とても暖かい方だなと思った。それが最初の上海のホテルでの出来事だったのでそこから少しずつ中国人に対する印象がよくなっていった。他にも上海博物館で展示物を見ているときに、同じように博物館を訪れた中国人の方に声を掛けられ、自分は日本をとても良く思っていて日本が好きだと伝えてくださり、それを聞いていた私を含めて一緒に見て回っていた仲間たち全員がとても嬉しい気持ちになり笑顔でお礼を伝えた。正直ここまで優しく暖かい人たちが中国にはたくさんいて、その気持ちを面と向かって伝えてもらえるとは思ってもいなかったことであつたため、とても感動したとともにもしこの訪中国に参加しなかったら、あまりいい印象を持つことができないまま過ごしていたことになっていたのかもしれないと思うと、心から参加できてよかったと思うしやはりテレビやネットの情報だけですべてを判断することは大事な情報を見落とすことにもなりうるのだと痛感した。研修会の時に佐々木団長もおっしゃっていた通り、テレビやネットニュースの情報が間違っているというわけではないが、それがすべてではないということが、実際に中国に行って現地の人たちと交流することで納得できた。

また、実際に中国に行ったことで学んだことがもう一つある。それは、中国ではコミュニケーションを取る際に英語を使っても、伝わる人があまりいないということである。私は大学の第二外国語で中国語を取っているため全くの無知というわけではないが、日常会話をできるほどのレベルではないため、お店などで質問をするときに英語を使ってみたが、英語で聞いても中国語で返ってくるのがほとんどで、中国語だとわからないという素振りを見せても英語を使おうとはしなかった。英語は共通語であるため何か困ったときは英語を使えばいいと考えていたが、国によっては英語を話せることが当たり前ではないということも痛感したため、だからこそこれからも中国語の勉強を続け、日本を訪れた中国人観光客と

も中国語でコミュニケーションを取れるように頑張ろうと強く思った。

このように訪中国に参加して実際に現地に行かないとわからなかったことがいくつもあったため、たくさんのことを学ぶことができ、この一週間で大切な仲間もできたため、本当に訪中国に参加してよかったと心から思う。